

# ブラジルにおける宗教研究と文化的アイデンティティの探求 (I)

—中南米文化史に関する覚書—

荒井芳廣

A Search for Cultural Identity & Religious Studies in Brazil (I)  
—Some Remarks on South-American Cultural History—

Yoshihiro ARAI

## Abstract

In Brazil most of eminent scholars and thinkers have chosen religious matters for their subjects because a religion is an integrated core of a cultural system. Consequently religious study is an indispensable part of Brazilian cultural history. The intention of this writer is to make a historiography of the religious studies in 20th century Brazil. But this paper presents some remarks for understanding the history of Brazilian cultural history and describe it until 1930, the year of Vargasian Revolution.

## 1. はじめに

本稿の直接的主題は、ブラジルにおける宗教研究の現況を記述することである。そこで論議されている論点、あるいは宗教的諸現象を説明するために用いられている概念や方法論が、ブラジルという国における知的活動の場面で、どのようにして生まれ発展してきたかを理解するには、この国の19世紀末から現在までの人文および社会科学の歴史に言及することが必要となってくる。この作業はまた、本稿も持っているもう一つの意図、すなわちブラジルをも含めた「ラテン・アメリカ」という広大な地域を背景にしてなされる文化的諸経験の記述という遠大な課題に対しささやかながらも貢献したいという筆者の希望にもかかわっている。文化史の素材として文学や芸術あるいは宗教それ自体でさえなく、「宗教研究」を選んだのにはいくつかの理由がある。ラテン・アメリカでは主として、土着のインディオ、植民者の白人、奴隷としてこの地に強制移住させられたアフリカ系の人々の三種の文化が接触し、競合あるいは融合しあいながら、独自の文化を求めて発展している。こうした「文化

変容」の過程において、「宗教」は他の文化的諸体系を統合する中核的部分であり、それゆえ容易に変化することがない。逆に言えば文化の統合ということが国民的課題となっているところでは、宗教をめぐるその時々状況は、その国の思想家や人文・社会学者にとって大きな関心事となる。従って宗教それ自体ばかりでなく、宗教に対する認識の歴史、すなわち宗教研究の歴史は文化史を形成する重要な側面なのである。実際ブラジルでは、本稿に名前の挙げられた人々の多くは、単に宗教研究者としてばかりでなく、その時代を代表する知識人として知られているという事実を付け加えておきたい。

## 2. 宗教研究上のテーマをめぐるいくつかの前提

ブラジルにおける宗教研究がどのような問題を中心に展開してきたのかを記述するための前提として、まずこれらの問題が生まれてきた背景について簡単に述べておこう。

ラテンアメリカの文化は、インディオ、ヨーロッパ、アフリカの三つの要素の並存、競合、あるいは融合などの歴史として展開されてきたことはすでに述べたとおり

である。藤田富雄氏はこの地域の宗教現象を理解する基本的枠組として、ラテン・アメリカを「インディオ・アメリカ」、【ユーロ・アメリカ】、【アフロ・アメリカ】、【メスティーソ・アメリカ】の4つに分ける民族地理的

な類型分類を提唱している。これら4つの類型は、ラテン・アメリカを国家の枠を超えた一個の全体として捉え、このコンテクストのなかで文化を考えようとする視点からは、比較的等価なものとして、それらのあいだ

表1 「皮膚の色」による地方別の人口構成 (1890/1950)

肌色 地方	年	Branços	Pretos	Amarelos (黄)	Pardos (褐色)	無回答	計
全 国	1890	44.1%	14.6%	—	41.4%	—	14,333,915
	1950	61.7%	11.0%	0.6%	26.5%	0.2%	51,944,397
北 部	1890	35.8%	5.6%	—	58.6%	—	476,370
	1950	31.4%	4.9%	0.1%	63.7%	0.2%	1,840,188
北 東 部	1890	34.5%	14.0%	—	51.5%	—	6,002,047
	1950	41.7%	13.3%	0.002%	44.7%	0.02%	17,937,407
南 東 部	1890	48.0%	17.8%	—	34.3%	—	6,104,384
	1950	70.7%	11.8%	1.3%	16.0%	0.2%	22,548,500
南 部	1890	72.0%	7.3%	—	20.7%	—	1,430,715
	1950	89.4%	4.7%	0.5%	5.2%	0.2%	7,840,870
中 西 部	1890	32.5%	13.3%	—	54.3%	—	320,399
	1950	56.5%	10.8%	0.3%	32.9%	0.3%	1,736,965

(出典：CEBRAP/Composição da População Brasileira, 1973)

表2 「宗教」による地方別の人口構成 (1900/1970)

1900年

宗教 地方	カトリック	プロテス タンリ	ギリシア 正 教	イスラム教	ユダヤ教	その他	不明	計
全 国	93.66%	1.07%	0.01%	123人	813人	0.08%	5.18%	16,626,991人
北 部	97.41	0.04	11人	0.01%	0.05%	0.04	2.45	695,112
北 東 部	95.52	0.12	41	15人	65人	0.02	4.34	6,749,507
南 東 部	93.17	0.58	637	37	318	0.09	6.15	7,012,568
南 部	86.65	7.15	587	35	72	0.29	5.88	1,796,495
中 西 部	95.98	0.11	—	—	—	0.07	3.84	373,309

1970年

宗教 地方	カトリック	プロテス タント	エスピ リスタ	その他	無宗教	無回答	計
全 国	91.89%	5.04%	1.26%	1.05%	0.75%	0.01%	69,975,237人
北 部	94.02	4.80	0.35	0.52	0.30	0.01	3,603,679
北 東 部	96.49	2.56	0.27	0.20	0.47	0.01	28,110,310
南 東 部	88.61	5.93	2.18	2.12	1.14	0.02	23,622,217
南 部	86.53	9.99	1.59	1.19	0.68	0.02	9,516,501
中 西 部	90.25	5.45	2.43	0.94	0.91	0.02	5,072,530

(出典：CEBRAT/Composição da População Brasileira, 1973)

には何も対立あるいは葛藤がないかのように見える。しかし現実にはこれら4つの類型は国家という枠のなかに存在し、その分布は均等ではない。むしろその分布の不均等から生ずる対立や葛藤あるいは融合や相互浸透が、ラテン・アメリカのそれぞれの国民文化が示す固有性となって現われるのである。同じラテン・アメリカに属するペルー、アルゼンチン、ハイチ、メキシコといった国々は、住民の人種別構成が異なり、それぞれ前述の4つの文化類型には近い国民文化を形成している。それでも現在の支配的文化に対抗する様々なサブカルチャーが存在し、文化的統合への独自の歩みを展開している。これらの国の文化史については別の機会に譲るとして、ここではブラジルについて考えてみよう。ブラジルは、その文化においてアフリカの要素の濃いハイチあるいは

ヨーロッパの要素の濃いアルゼンチンなどと比較して、その支配的文化においてどの要素が特に濃いかということもない。またその国土の広さに比例して、各文化的要素あるいは人種の分布が地域によって異なっている。その結果、地域によって独自のサブカルチャーが形成されることになり、国民文化の探求のなかでそれらは互いに主導権を争うようになる。こうした過程のなかで生じた一連の事件(19世紀末から20世紀初頭にかけて、ブラジルの各地で、「メシア主義」的あるいは「千年王国主義」的な宗教運動が起きている)、あるいはそれらに対する同時代人の反応は宗教研究の大きなテーマとなり、さらにこのテーマに対する研究者たちの一連の解釈もまたブラジルという国が自己のアイデンティティを模索する過程で生み出した文化的表現なのである。

そこでブラジルにおける文化的アイデンティティの探求に独特の性格を与えている、人種および宗教の地理的分布について概観してみよう。表の1,2は「国勢調査」の資料に基づいて、ブラジル研究・計画センター(CEBRAP)の研究員が宗教、教育、人種、所得、労働力などのテーマに関して論ずるために作成した表をさらに筆者が本稿の論旨に沿って簡略化したものである<sup>2)</sup>。宗教統計は宗教研究の基礎をなす重要な部門であるから、少し詳しく説明を加えよう。

表1は、「皮膚の色」による人口の分布である。「Branços」(白)、「Pretos」(黒)、「Pardos」(褐色)、「Amarelos」(黄)の4つの項目によって分類されている。これは表現型としての皮膚の色についての分類であって、遺伝的な血統による分類ではない。そのうえ「Pardos」のカテゴリーには、インディオ(土着の諸部族)ばかりでなく、mulatos(白人と黒人の混血)、caboclos(白人とインディオの混血)、cafusos(黒人とインディオの混血)あるいはそれらのあいだの様々な中間型まで含まれており、きわめて大雑把な分類であるが、とにかくこの分類に従って、表1を解釈してみよう。

まず1890年から1950年のあいだの人口の変化を人口構成比で見えていくと、白人種は増加、黒人種および褐色人種は減少の傾向にあり、黄色人種が新たに登場している。総人口の増加を考慮しその結対数を計算してみると黒人種、褐色人種いずれも数の上からは増加しており、留意しなければならないのは白人種の飛躍的増加である。実はこれら一連の傾向は共通の要因によって引き起こされた出来事の結果なのである。すなわちブラジルでは1850年に奴隷の輸入禁止が実施されヨーロッパ移民の誘致が開始されたが、1888年に奴隷制が廃止されると

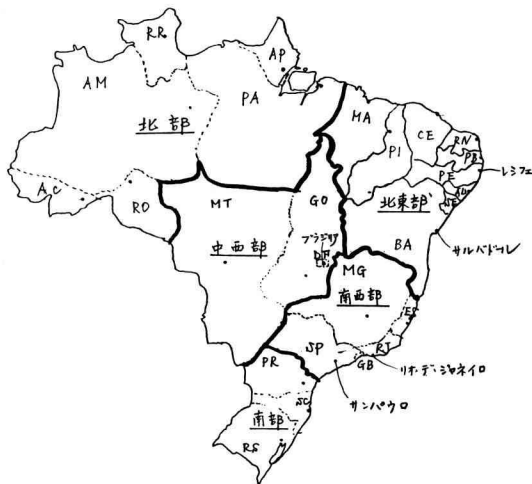


図1 ブラジルの地域区分

ブラジルは次のように五大地域に区分されている。

北 部…アクレ州(AC)、パラ州(PA)、アマゾナス州(AM)、 Rondônia連邦直轄領(RO)、ロライマ連邦直轄領(RR)、アマパ連邦直轄領(AP)。

北東部…マラニョン州(MA)、ピアウイ州(PI)、セララ州(CE)、リオ・グランデ・ド・ノルテ州(RN)、パライバ州(PB)、ペルナンブコ州(PE)、アラゴアス州(AL)、フェルナンド・デ・ノローニャ島(FN)、セルジッペ州(SE)、パイア州(BA)。

南東部…ミナス・ジェライス州(MG)、エスピリト・サント州(ES)、リオ・デ・ジャネイロ州(RJ)、グァナバラ州(GB)、サンパウロ州(SP)。

南 部…パラナ州(PR)、サンタ・カタリーナ州(SC)、リオ・グランデ・ド・スール州(RS)。

中西部…マツト・グロッソ州(MT)、ゴイアス州(GO)、連邦区(DE)、首都ブラジリア)。

その数は飛躍的に増加した。例えば奴隷制廃止から4年後の1892年から1904年までのあいだにブラジルに渡ったイタリア移民の数は80万人に昇ったといわれる<sup>3)</sup>。1908年には日本からの移民も始まっている。

次に地方別の人口分布について眺めてみると、全国規模で観察された白人種の増加は主として南東部、南部に起きた現象であることがわかる。人口構成の観点から、地域と人種の関連を眺めてみると、褐色人種は北部で最も高く(63.7%)、次いで北東部において高い(44.7%)。黒人種は、北東部で最も高く(13.3%)、次いで南東部が高く(11.8%)。南東部(70.7%)やとりわけ南部では白人種の人口構成比が圧倒的に高い。

表2は「宗教」による人口構成比を示したものであるが、この表を解釈するためには「皮膚の色」の場合以上の限定条件が必要される。まず宗教の分類項目について1900年と1970年では異なっている。「ギリシア正教」、「イスラム教」、「ユダヤ教」の項目が消え、「エスピリスタ」の項目が加えられている。これは上述のような宗教の信者が存在しなくなったことを意味するのではなく、分類項目が最も多かった1940年の『国勢調査』にある「神道者」、「仏教徒」、「実証主義者」<sup>4)</sup>などととも「その他」の項目に入れられてしまったと考えられる。「エスピリスタ」の項目はすでに1940年の統計にも見られるが、これは他の資料から今世紀に入って新しく勢力を伸した宗教であることがわかる。この統計の最大の欠陥は、狭い意味での「宗教」の概念に充て当まる宗教しか語めず、いわゆる民俗宗教に属する宗教を無視していることにある。後者に属する宗教としては、インディオの土着信仰やアフリカの部族宗教を基礎にカトリズムやエスピリチズムと習合しながら発展してきたアフリカ系の諸宗派などがあり、いずれも低い階層で支持されている宗教である。ブラジルはカトリック教国であり、圧倒的にカトリック教徒が多いが、その項目の下には名目の上では「カトリック」であるが実際はこうした種類の宗教の信者も含まれている事実には注意しなければならない。

このような欠陥をもつ統計であるが、「エスピリスタ」と並んで、1900年から1970年のあいだの変化としてこの表から知ることができるのはプロテスタントの増加であろう(1.07%→5.04%)。地方別に眺めると、1900年の統計でも南部ではプロテスタントの割合が高い(7.15%)が、これは前述のようにこの地方にヨーロッパ移民、とりわけプロテスタント教国のドイツ移民が住んでいるためであると考えられる。1970年では、北東部の数

字が少し低いのを除けば、全国ほぼ平均に教勢を増している。「エスピリスタ」が、北部、北東部で低く、南東部、南部、中西部で高いというように偏りがあるのと対照的である。これら二つの現象は、近年のブラジルにおける宗教変化の徴候として宗教研究の重要なテーマとなっている。

以上、大雑把であるがブラジルにおける宗教研究の歴史を理解するための前提として宗教と人種の地理的分布を概観した。さらに詳しくは、宗教研究との関連で必要に応じて述べたいと思う。

### 3. 20世紀ブラジルにおける宗教研究

文化史のコンテクストのなかで宗教研究を考えようとするとき、ブラジルという国の文化史がどのような発展の形態を採ってきたかということが問題となる。宗教研究は、一致するしないにかかわらず、この文化史一般の発展形態との関連によってはじめて文化的行為として位置づけることができるのである。とはいえブラジル文化史の構造を解明することは、宗教研究の歴史を辿ることよりも多くの学問的蓄積を研究者に要求する。これは筆者の現在の能力に余る仕事である。従ってここではとりあえずブラジル文化史の発展についての既存の研究のいくつかを採用している枠組を借りて、本稿における宗教研究史の記述枠組としたい。

本稿は20世紀初頭から現在までの宗教研究の動きを対象としているが、まずこの時期がブラジル文化史発展のなかでどんな位置を占めるのかということを示すために、N.W. ソドレの『ブラジル文化史要諦』<sup>5)</sup>を参照したい。この本のなかでソドレは、ブラジル文化史を(1)植民地文化の段階(1500ごろ-1750)、(2)移行文化の段階(1750-1930)、(3)国民文化の段階(1930-現在まで)の三段階に分けている。ブラジルの文化の歴史の始まりをどこに設定するかについては歴史学者のあいだでも意見の分かれるところであるが、ソドレはおそらく『ブラジルの文化』<sup>6)</sup>におけるF・デ・アゼヴェドなどの記述にもどついで比較的早い時期にその始まりを設定している。彼の枠組に従えば、我々が論じようとしている20世紀初頭から現在までという時期は、第二段階の末期と第三段階ということになる。第一段階と第二段階の境は、西径50度以西をポルトガル領とするマドリッド条約の締結に、第二段階と第三段階の境は、いわゆる「1930年の革命」に置かれている。「1930年の革命」を一つの区切りとみなすことに異論を唱える者は少ないであろう。第二段階を1750年から1930年の180年間とす

るのは、あまりに長すぎるという反論の方が多いであろう。というのもこの180年間には独立(1822年)、奴隷解放(1888年)、共和制の成立(1889年)など政治的、社会的に重要な区切りはいくつもあるからである。ソドレは第一段階、第二段階とも「移植文化」と定義し、その差違は「小ブルジョワ」階級の出現の前であるか後であるかにあるとしている。第一段階では、社会関係は主として、「奴隷」と「その主人」すなわち植民者とその使用人の二者関係であったのに対し、第二段階では、この二者関係の外側に小ブルジョワ階級が形成されたのである。これは文化の上から見ると、地域や階層による多様性をもった文化の担い手が登場してきたことを意味する。にもかかわらずソドレが第二段階を依然として「移植文化」と定義するのは、彼の記述の基盤となっている「文化」概念あるいは文化の担い手として考える人々が限定されているからである。ある集団の生活様式の総体を意味する広義の「文化」概念を適用すれば、この第二段階の180年にこそ今日のブラジル文化を構成する諸要素が形成されたといえる。「ミネルヴァの梟」の譬えどおり、この事実を狭義の「文化」の担い手、つまり知識人たちが発見するのは第二段階も末期においてである。この知識人の後ればせの認識を代表するのが、本稿の主題である宗教研究なのである。従って狭義の「文化」の歴史について言えばソドレの指摘すところ、第二段階は外来の文化に依存する「移植文化」であって、第三段階に入ってはじめてブラジル独自の文化が形成され始めると言える。

次に問題となるのは、第三段階、つまり1930年以降の文化史をどのように区分するかということである。この時期の文化史の区分として宗教研究の歴史を辿ろうという我々の目的に有効と思われるのは、C. G. モタが「ブラジル文化のイデオロギー(1933-1974)」<sup>7)</sup>で示した時期区分である。この本のなかでモタは、1933年から1974年のあいだのブラジルにおける人文・社会科学の認識、とりわけ歴史学的認識の発展には次の5つのモメントが存在すると指摘している：

- (1) ブラジルの再発見(1933-1937)
- (2) 大学における研究の最初の成果(1948-1951)
- (3) 改良主義的誇張と改訂の時期(1957-1964)
- (4) 急進的改訂(1964-1969)
- (5) 「依存」の行き詰まり(1969-1974)

宗教研究の歴史もまたこうした文化一般の流れのなかで、あるいはその一部として展開してきている。とりわけ(1)および(2)は宗教研究にとっても重要な時期区分で

あり、ブラジルの宗教研究の出発点として今日まで影響を与えている重要な時期である。これはモタによる時期区分を本稿での記述の枠組として採用した理由でもある。各時期の文化研究の特徴についての記述はここでは省き、個々の時期の記述のなかで説明してゆこう。

### 3-1 宗教研究の出発点(1900年から1930年まで)

この時期は今日の宗教的研究にとって様々な意味で覚醒的な三つの業績の登場によって特徴づけられる。すなわちN・ロドリゲスの「バイア黒人における物神崇拝のアニミズム」(1900)<sup>8)</sup>、ダ・クーニャの「奥地」(1902)<sup>9)</sup>、M・ケリーノの「アフリカ人種とその習俗」(1912)<sup>10)</sup>である。

これらの著作が扱っている研究対象は、地域的にはいづれもブラジル北東部のバイア州で観察された宗教現象であるが、ロドリゲスとケリーノの記述している宗教現象がその州都であるサルバドールを舞台に展開されるアフリカ系移民の宗教であるのに対し、ダ・クーニャの著作であるカヌードスの乱はバイア州の奥地で展開されたメシア主義的な宗教運動である。ある年代の科学的認識の特徴は、個々の研究の内容以上その時代が関心を示し研究することを許している対象の選択に現われてくる。「黒人」と「メシア主義」という二つの研究主題も20世紀初頭のブラジル人の心性をよく表わしている。前述のように1888年に奴隷制度が廃止されたが、その前後において奴隷制についての議論と平行してアフリカ系住民の文化に対する関心が高まった。1889年には共和制が成立しブラジルは近年国家への道を模索し始める。ダ・クーニャの「奥地」のテーマであるカヌードスの乱(1896-1897)を筆頭に同じく北東部で起こったシセロ神父の運動(1897-1934)、南部のサンタ・カタリーナ州の奥地で起きたコンテスタードの乱(1912-1916)<sup>11)</sup>など大規模なメシア主義的な宗教運動は、この時期に生じ、他地域の人々の注目を浴びている。こうしたメシア主義の運動は国を統一し近代国家の確立を目指す政治権力およびそれを後援する経済的勢力と地方において既に育ちつつあった土着的な政治的あるいは文化的諸制度との対立を背景に展開された宗教運動である。ダ・クーニャはカヌードスの乱を国家側のいわば従軍記者的な立場から観察し、その記録として「奥地」を書いたのである。同じ時期、文化の領域でも「国民文化」の創造ということが課題となっていたが、彼がこの運動のなかで発見したのは、自分の属する「都市部の文化」と異なる「奥地の文化」の存在であった。この時点でのダ・クーニャの功績は、「複数のブラジル」がブラジルの現実であることを

明らかにしたことにより、これが今日においても「奥地」自体が国民文学と見なされる理由となっている。しかしながら奥地の文化に対する価値判断に関してはその後進性を強調した。この価値判断の是非は置くとして宗教研究の流れのなかで奥地の文化（この場合はメシア主義的宗教運動）に対する評価は肯定的なものとなり、近年の「文化的依存」の理論においては奥地の文化と都市部の文化の価値関係は逆転し、前者がフランスやアメリカ合衆国などの先進諸国の文化に依存する非自立的な文化であるのに対し、奥地の文化はオリジナリティをもった自立的な文化と見做されるようになっていくのである<sup>12)</sup>。ダ・クーニャの方法が奥地のメシア主義を都市部の文化との対比で見るという視点、すなわち社会学的な分化論であったのに対し、N・ロドリゲスのアフリカ系住民の宗教に対する視点は、他の文化的形態、とりわけ研究者自身が属している知識人の文化とは全く異質の孤立した文化形態としてみる文化的異質論に属している。しかも当時の宗教学および人類学の宗教理論の影響のもとに、アフロ＝アメリカンの宗教を物神崇拜的なアニミズムという、宗教の発展において低い段階のものとして位置づけたのである。同じアフリカ系住民の宗教についての研究でありながらM・ケリーノの諸研究は文化のレベルにおける他の諸人種との連続性を認めている。アフリカ系住民の文化のなかの白人的あるいはインディオ的要素の混在は「シンクレティズム」の理論として練り上げられ、N・ロドリゲス、M・ケリーノはいずれもその先覚者として位置づけられていく。だがM・ケリーノは、N・ロドリゲスの研究が主としてセクト的な閉じられた宗教現象に向けられていたのに対し、M・ケリーノは、イェマンジャー (Iemanjá) のような祭あるいは民間伝承のような開かれた宗教現象をも研究対象とした。後者の場合には諸文化の融合は、単に表現のレベルばかりでなく、文化的実践にまで及ぶからである。ちなみに近年、イェマンジャーの祭りは地方的な行事から大都市の祭りへと発展し、その参加者はリオ・デ・ジャネイロやサンパウロでは数十万人に達し、ブラジルの社会的文化的統合のシンボルとなっている<sup>13)</sup>。

ここに挙げた三人の学問的背景について詳しく論ずることは別の機会に譲りたいが、三人はいずれも作家(ダ・クーニャ)、医師(N・ロドリゲス)、役人(M・ケリーノ)といわゆる専門の学者ではなかった。その立論の仕方や研究方法に関して言えば、ダ・クーニャは社会学、N・ロドリゲスは人類学、M・ケリーノは民俗学の系列にそれぞれ連っていく。現代ブラジルの代表的な宗

教社会学者であるM・I・P・デ・ケイロス、その師であり、我々がこれから論ずる1940-50年代にかけてブラジルの宗教研究に大きな影響を与えたR・バステードの追悼論文集のなかでバステードをブラジル社会学のなかに位置づけるために社会体系に関する「分化論」と「統合論」、文化体系に対する「異質論」と「同質論」という枠組を設定している<sup>13)</sup>。この枠組に従えばダ・クーニャは社会的分化論、N・ロドリゲスは文化的異質論、M・ケリーノは文化的同質論として位置づけることができる。M・I・P・デ・ケイロスはさらに「楽天主義」と「悲観主義」という二種類の態度をこの枠組に付け加えているが、筆者の解釈では、これは社会体系と文化体系とのダイナミックスに対する考え方についての分類である。前記三人にはまだ二つの体系が創り出すダイナミックスについての詳細な考察はなかったと思われるが、例えばダ・クーニャは、人種のあるいは地域的格差による社会的分化は文化における異質性の原因となり、それらのあいだの溝は容易に埋めることができないという悲観的な考え方をもっていた。

三人が採り上げた研究対象は人種的には、「混血」と「黒人」であった。原住民である「インディオ」がブラジルにおける文化研究のテーマとして大きく採り上げられるようになるのは、この時期の半ばごろに生まれた「近代主義」(modernismo)と呼ばれる芸術運動においてである。この運動は新しい国民文化の創造を目指した一種のナショナリズムであったが、実践的には過去を否定し未来を志向する前衛主義であった。従ってインディオへの注目も伝統への回帰ではなく、ヨーロッパのフォービズムなどの影響のもとに表現上の一項目として用いられたにすぎず、奥地を舞台とする地方的色彩の濃い文学などとは全く対立するものであった。とはいえサンパウロで生まれた近代主義という芸術運動は、地方においてはそれに反発する形で「地方主義」を生み、サンパウロでは社会学、民族学、フォークロアなどの学問がブラジルにおいて制度化されるきっかけをつくったという事実は否定できない。(未完、以下次号)

## 註

- 1) 藤田富雄『ラテン・アメリカの宗教』、大明堂、昭和57年、pp.31-37.
- 2) Camargo, Procópio Ferreira de et als., *Composição da População Brasileira*, Caderno CEBRAP, 15, 1973.
- 3) 齊藤広志『新しいブラジル』、サイマル出版会、昭和49年、pp.76-87.



- 4) 社会学方法論としてコントによって提唱された「実証主義」がブラジルにおいてどのようにして「宗教」と見なされるに至ったかについては次の書を参照。清水幾太郎「昨日の旅」, 文藝春秋社, 昭和52年。
- 5) Sodré, Nelson Werneck, *Síntese de História da Cultura Brasileira*, 8ª. ed. Civilização Brasileira, 1980.
- 6) Azevedo, Fernando de, *Brazilian Culture — An Introduction to the Study of Culture in Brazil* (Facsimile of the 1950 edition), Hafner Publishing Company, 1971.
- 7) Mota, Carlos Guilherme, *Ideologia da Cultura Brasileira (1933–1974)*, *Pontos de partida para uma Revisão Histórica*, 4ª ed. Editora Ática, 1978.
- 8) Rodrigues, Nina, *O Animismo Fetichista dos Negros Bahianos*, *Civilização Brasileira*, 1935.
- 9) Da Cunha, Euclides, *Os Serões*, Livraria Francisco Alves, 13ª. edição, 1936.
- 10) Querino, Manuel, *Costumes Africanos no Brasil*, Civilização Brasileira, 1938.
- 11) 拙稿, 「民衆の小冊子におけるメアニズム — ブラジル北東部の宗教的イデオロギー —」, 中牧弘允編「神々の相克 — 文化接触と土着主義」, 新泉社, 昭和57年。
- 12) 拙稿, 「再生する女神」, 『季刊民族学』13号, 昭和55年。
- 13) Queiroz, Maria Isaura Pereira de, Roger Bastide, sociologue brésilien, Jean Poirier et François Raveau eds., *L'Autre et l'Ailleurs. Hommage à Roger Bastide*. Berger-Levrault, 1976.